

[巻頭言]

学会誌の役割再考

細野公男

1 はじめに

学会の顔である学会誌は、学会員の研究・実践成果を発表する場である。そして若手研究者にとっては、学術界における自分の地位を確保するための、換言すれば業績評価のための、重要なメディアとなっている。また学会誌は、学会からの社会に対する態度表明や提言の場でもあり、社会が直面している問題を解決するために積極的に寄与する際のメディアでもある。

このような機能を持つ学会誌を役割の点から考察すると、それは情報の入手・獲得手段と発信手段との二つに分けることができる。

2 情報の入手・獲得手段としての学会誌の役割

学会誌の入手あるいはそれへの自由なアクセスが学会員の権利であることは、論を俟たない。そして、学会誌を介した情報獲得が、学会に加入する主な理由であると広く考えられてきた。このような形での情報獲得が、学会員にとって大きな特典とみなされていたからである。学会員を増やすための便法として、学会誌への非学会員のアクセスを制限する方策がこれまでとられているが、これも学会員による情報の入手・獲得に、学会誌の主な役割があるとみなした結果であろう。

しかしこうした理由は、当を得たものであろうか？明確な根拠のない単なる幻想・妄想にすぎないのではないだろうか？実際、学会誌に掲載されている研究論文や記事を読む学会員は少なく、またそのためにだけわざわざ入会する人も極めて少ない、との意見をよく耳にする。

Kimio Hosono

前情報システム学会副会長

[巻頭言] 2008年5月3日受付

© 情報システム学会

本当に読むのは著者自身と査読者にすぎないとの皮肉な見方さえある。会費を払ってまでも学会誌を読もうとする人は、非常に少ないと思われるのである。

これまで学会誌は、情報を入手・獲得するための中心的な手段と位置づけられてきた。もちろんこの役割は現在も不変である。しかしインターネットの普及によって情報入手の手段は多岐にわたっており、そのための手段としての学会誌の役割は、過去に比較してそれほど高くはなく、むしろ減少傾向にあるといえよう。これは、情報入手・獲得手段としての学会誌の重要性が低下していることを物語っている。

3 情報発信手段としての学会誌の役割

大学や学術研究機関での新しいポストの獲得および昇進と関わる業績審査では、査読付き学会誌に掲載された論文数の多少が大きな影響を与えるため、学会誌の情報発信機能に対するニーズは高い。したがって、情報発信の役割は一段と強まっているように思える。学会誌は、研究成果や提言を広く発信し学術界および一般社会に対して影響力を行使するための道具と考えるべきであろう。学会員の情報発信が主な目的であるとさえ、極論することもできる。

もしそうであるのならば、学会誌ができるだけ多くの人の目に触れる、つまりその露出度を高める、必要があることはいうまでもない。こうした立場に立つと、学会誌へのアクセスが学会員に限定されていることは、発信対象（先）が限られるという意味で、好ましいことではないといえる。学会員が学会誌を通じてできるだけ多くの人たちに自分の研究・実践成果や意見・考えを伝達する権利を、奪うことになりかねないからである。

発信機能を高めるには、学会員であるか否か

にかかわらず学会誌に収録されたすべての論文・記事への常時アクセスおよび種々のチャンネルを介してのその利用を、保証する必要がある。その結果、たとえば学会の社会に対する態度表明や提言を読むのはたかだか学会員にすぎないのではないかと、といった類の危惧を払拭することができよう。

4 情報発信機能を高めるための方策

電子版学会誌は、より広い範囲にわたって読者を獲得できる可能性が高いので、印刷版に比較して潜在的利点は大きいといえる。学会誌の発信機能をさらに充実させるための方策に、オープンアクセス化（誰もが自由にアクセスできること）がある。オープンアクセス化を進める手段として二つの方法が考えられる。第一は学会独自でオープンアクセス化を行うことである。たとえば、学会ホームページにアクセスすれば、何らの制約を受けることなく全ての論文・記事を入手できるようにすることがあげられる。

第二は外部のシステムに学会誌を搭載することである。近年独立法人科学技術振興機構（JST）によって構築された科学技術情報発信・流通総合システム（J-STAGE）を利用して学会誌を公開する学会が増加しつつあり、2008年4月末時点で『情報知識学会誌』など470以上のジャーナルが公開されている。J-STAGEに搭載された学会誌は、JSTリンクセンターを通してCrossRefなどを介した電子ジャーナル間の引用文献リンクサービスの恩恵を受けることができる。（<http://info.jstage.jst.go.jp/info/index.html> を参照）

このシステムを利用することによって、学会誌の露出度が著しく高まり、より多くの人目に触れるようになることは確かであり、学会誌のアクセス件数の増加に結びつき得る。

また、これら二つの方法を組み合わせることも意義があろう。露出度がさらに高まるからである。

5 情報システム学会での取り組み

編集委員長をはじめ編集委員諸氏の尽力に

よって情報システム学会誌が順調に刊行されていることは喜ばしいことであり、その活動に対して深い敬意を表したい。創刊時から電子ジャーナルの形態をとってきた本学会誌は、情報発信機能を一層高めることができるという点で有利な立場にある。そのためには、本学会誌の発信のありかたに関していくつか再検討すべき点があろう。

たとえば、本学会でもホームページを介して学会誌へアクセスする機能が用意されている。しかし、最新号に関してはオープンアクセス機能が提供されていないため、学会員しかアクセスすることができない。最新号にアクセスするためのユーザIDとパスワードは、それが刊行されるたびにメールで学会員に送付され、学会員はユーザIDとパスワードを入力してその号にアクセスする。こうしたプロセスは、前述した理由から本学会にとって好ましくなく、事務局および学会員の双方にとって非生産的な作業であるといえよう。最新号までを対象としたオープンアクセス化が早急になされることを期待したい。

さらに本学会誌のJ-STAGEへの搭載を前向きに検討することも望まれる。学会誌へのオープンアクセスが2種類のチャンネルで可能となれば、本学会誌の社会的認知度をさらに高める道が開かれることになろう。また、学会員からの投稿も増加し、結果として本学会の影響力を強めることにもつながるのである。

どのような特色を持つ学会であっても、今後はその基本姿勢として学会員による情報発信をこれまで以上に重視する態度をとることが、強く求められよう。本学会が上述した環境の変化に適切に対応して、学会誌の刊行に取り組むことを期待したい。

著者略歴

1967 慶應義塾大学大学院工学研究科修士課程管理工学専攻修了。同大学文学部助手。1969 同大学院文学研究科修士課程図書館・情報学専攻修了。1982 同大学文学部教授。2001 同大学院文学研究科教授。2001.10-2005.9 慶應義塾図書館長。2006 慶應義塾大学名誉教授。